【資料１－４】

定性評価の状況（令和４年度）

評価指標９	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート

【日本画】

14 本の展覧会に計 31 点の作品を出品した。

「歌枕　あなたの知らない心の風景」（サントリー美術館、4 点出品）、「雪舟と狩野派」（山口県立美術館、3 点出品）、「江戸狩野派と馬」（馬の博物館　3 点出品）、「東海道の美　駿河への旅」（静岡市美術館 4 点出品）など、風景表現、静岡ゆかり、狩野派、といった当館収集方針に関連するテーマ展に複数点を出品した。当館の特色あるコレクションが注目され、活用されていることをよく示すものといえる。

個展では、「速水御舟展」（茨城県近代美術館）に 2 点を出品、特に《鍋島の皿に柘榴》についてはメインビジュアルとしてポスター・チラシ、図録表紙等に掲載され、展覧会を象徴する作品として大きな注目を集めた。「建部凌岱展」（板橋区立美術館）、「岡田米山人・半江展」（三重県立美術館）、「横山大観展」（名都美術館）、「椿椿山展」（板橋区立美術館）等個展にも所蔵品・寄託品を出品、内容の充実に貢献した。

【日本洋画】

日本洋画では 3 つの展覧会に計 8 点の作品を出品した。

昨年度から巡回の「生誕 110 年　香月泰男展」展（足利市立美術館）には、香月泰男の《冬畠》を、引き続き出品した。

「杉浦非水　時代をひらくデザイン」（静岡市美術館）に、黒田清輝の《富士之図》6 点を出品した。黒田がフランスから持ち帰ったアール・ヌーヴォーの図案に出会い、デザインの道へと進んだ杉浦の軌跡が本作により鮮明に浮き上がった。

また、「佐伯祐三―自画像としての風景」展（東京ステーションギャラリー）に佐伯祐三《ラ・クロッシュ》を出品した。佐伯の大規模な回顧展として東京では 18 年ぶりとなる本展では、制作年代ではなく制作場所ごとに章立てをおこない、佐伯の 2 度のパリ滞在時の作品の相違を比較しやすい構成であった。本展は、翌年度、大阪中之島美術館に巡回し、2 度目のパリ滞在期の制作である《ラ・クロッシュ》も引き続き出品を予定している。

【西洋】

4 点の作品を、それぞれ異なる展覧会に貸出・出品した。

コロナウイルス感染症の収束傾向に伴い、海外への貸出も復活し、クロード・モネ《ルーアンのセーヌ川》を、フランスのリュクサンブール美術館で開催された「レオン・モネ、芸術家の兄弟にして収集家」展に出品した。印象派の画家クロード・モネの兄で、コレクター、印象派の擁護者、兄弟ゆかりの土地ルーアンの実業家であったレオン・モネに焦点を当て、モネとその周辺の印象派の絵画、レオンのコレクション、モネ家のドキュメントや家族写真等で構成するフランスでも初の展覧会で、当館作品はルーアンを描いた作品の一つとして紹介された。本作が海外展に出品されるのは 5 度目（フランスでは 2 度目の展観）かつ当館所蔵品では最多の海外公開であり、当館の存在とコレクションをさらに知らしめる機会となった。

国内では、「モディリアーニ―愛と創作に捧げた 35 年」展にモディリアーニと交流したジャック・リプシッツの《母と子》を、ミロと日本との関係を紐解いた「ミロ展―日本を夢見て」展にジョアン・ミロ《シウラナの教会》を、また 19 世紀後半から 20 世紀初めにかけてフランスのブルターニュ地方を表象した

西洋および日本人作家の作品を一堂に会した「憧憬の地ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」展にポール・ゴーギャン《家畜番の少女》を貸し出した。

【現代】

昨年度に引き続き、カール・アンドレ《鉛と亜鉛のスクエア》を「ミニマル／コンセプチュアル　ドロテ＆コンラート・フィッシャーと 1960－70 年代美術」に貸し出した。展覧会は、DIC 川村記念美術館、愛知県美術館、兵庫県美術館の順に巡回し、昨年度末から今年度にかけて兵庫県美術館にて開催された。作品に加え、フィッシャーが運営した画廊の資料も豊富に紹介されており、当館所蔵作品の評価にもつながる、良企画であった。

評価指標 13	展覧会に対する外部評価

【絶景を描く―江戸時代の風景表現】

・名所絵、山水画、真景図、風景画―景色を描いた絵画を呼ぶのにさまざまな言葉があるように、そこで実現された風景表現も実に多様だ。本展では、とりわけ多彩な風景表現が試みられた江戸時代・18 世紀後半以降のそれらを取上げ、その魅力、面白さを探ろうとする。なかでも静岡県と云う地の利もあり、富士山を描いた館蔵品、寄託品も多いことから、問題を富士図に収束させたあたりは、常套的ではあるが、うまい。但し、提示された富士図は余りに少ない。コロナ下でもあり、他処からの借用が困難であったにしても、である。わたしのごく個人的な興味からすれば、タテ長画面の富士図（三幅対形式をとったものも含めて）があってもよかったのではないかと思う。原在正の富士山図巻の面白さを際立たせるためにも、である。とは云え、江戸絵画史を記述する上で最も重要な問題たる風景表現に絞った展示は貴重で学界、鑑賞界に裨益するところ極めて大きい。在正の富士山図巻の展示は衝撃的でさえある。（榊原委員）

・まず、絶景というものをどんなものか定義を試み、そこから第 1 章、名所をめぐる絵画、第 2 章、南画家たちの試み、第 3 章、刷新される風景表現、第 4 章、富士山を描き分ける、第 5 章、富士山を取り巻く景観の変化と 5 つに分類したのは、よく考えられたもので、賞賛に価する。作品がよく吟味されており、数もまずまずであった。県立美術館が“東西の風景”を収集してきたのであるから風景表現をテーマにして、こうした展示がもっと（切り口を工夫して）行われるべきであろう。正統派の美術館としてこうした方針を今後とも貫いてもらいたい。（金原委員）

【みる誕生　鴻池朋子展】

・「みる誕生　鴻池朋子」展は、コンセプト、展示方法を含め、作家の個性と考え方が色濃く、投影された展覧会になっていた。作家と入念なディスカッションをし、作家の意向を反映しながら展示する作業は大変だったろうが、巡回会場の空間的条件に合わせた展示方法のそれぞれのヴァリエーションは、学芸にとっても創造力を発揮する絶好の機会になったことがひしひしと感じられる展示になっていた。静岡県立美術館の場合のプロムナードにおける野外展示を実現するための調整作業も大変だっただろうが、作家のチョイスを満たし、結果としてだが、観客にも美術館の違う顔も見せるとてもいい機会になっていたと思う。また、出品作品も作家の世界観を様々な観点から反映した充実したものになっており、自分自身肉薄できたかについてはあまり自信がないが、多少の驚きを含め観客として十分に楽しめたと言える。ただ、美術館へは、額縁に入った絵が壁に並んでいることを前提に訪れる一般の観客には、学芸の相当の努力にもかかわらず、やはり最後まで困惑の感覚が続いたままであったのではないかと懸念する。（潮江委員）

・鴻池朋子は、日本美術の中に確立されている「絵画」というジャンルでの個々の作品制作から創作活動を開始し、大原美術館での「鴻池朋子　第 0 章　世界はいつも密やかで　素晴らしく　謎めいている」（2006 年 4 月 28 日―5 月 28 日）においてホワイトキューブとは異なる同館内の歴史的建物に平面、立体を含む自作を展示して空間全体を構成して以降、個々の作品を自らのコンテクストで相互に関連させて構成することに興味を移してきたように思われる。「鴻池朋子　インタートラベラー　死者と

遊ぶ人」（東京オペラシティ・ギャラリー　2007 年 7 月 18 日－9 月 27 日）、「鴻池朋子　根源的暴力」（神奈川県民ホールギャラリー　2015 年 10 月 24 日―11 月 28 日）などがその例である。

作品を相互に連関させて表現する方法は、初期の刊行となる絵本『みみお』（2001 年）にすでに見られたもので、目のないみみおが自然界で多くのものに出会うこの物語は鴻池のこれまでの表現活動の根底を流れており、このたびの展覧会「みる誕生」にも通う。

特に静岡県立美術館での展示は、美術館という建物、制度に揺さぶりをかけるとともに、そうした制度に寄らずに物をみる体験を提供する意図が随所に表れていた。その例として、静岡県立美術館の裏山における作品の露出展示、同館所蔵品と国立療養所菊池恵楓園絵画クラブの作品を展示ケースに並べて展示した構成などが挙げられる。リレー展と鴻池が名付けたこの展覧会の静岡県立美術館でのハイライトは裏山での展示であったと思う。これまで鴻池が美術館の空間の中で表現してきた美術館という枠組みへの問いが、美術館を抜け出した空間と対比されることでより明確に感じられた。　　（山梨委員）

【近代の誘惑―日本画の実践】

・館蔵品と寄託品による展覧会だと云う点で、自ずから限界があるのは仕方ないが、その上で総論（ごあいさつ）と各章各節の内容を的確かつ要領よくまとめた一文を提示し、そこに手元にある作品を落とし込むことで近代の日本画の歩みを構成した展示は見事。高く評価したい。担当学芸員の日ごろの研鑽の賜物だろう。と同時に徳岡神泉、福田平八郎の作品まである静岡県立美術館のコレクションと、長谷川玉峰、鈴木松年、下条桂谷、山内多門、吉川霊華などの作品まで含む充実した寄託品とには驚きを禁じ得ない。今後ともそうした作品の紹介を期待する。　　（榊原委員）

・近代日本画への誘い”ということであろうが、作品には心に引きつけるものが幾らかでもなければならない。この展覧会ではキャプションに注目してみた。目測でたて 14.5×よこ 20.5㎝の寸法であったが、観衆が見るのにはほぼ適当であると思われた。文体はですます調であり、丁寧な感じがして好ましく思われた。　　（金原委員）

評価指標 17	調査研究に対する外部評価

（『静岡県立美術館紀要』No.38（令和 5 年 3 月 31 日刊行）掲載論文について）

新田建史「ピラネージの版画技法について」

・論者が「腐食液描法」と名付けた技法が、ピラネージの銅版画の表現の展開にとってどのような功罪が生じたかについて、作品の細部拡大図を活用しながら細かく論じられた論考であり、独自の着眼点で作品制作に肉薄しようとする姿勢は評価に値する。しかも、その検討評価をまとめた結論とも言うべき分析部分の、ことにその技法を用いることと制作のめざすべき方向性との間に生じる乖離や矛盾、あるいは新たな展開についての可能性について触れた個所もその論点は首肯し得る。ただ、視点がミニマムに絞り込まれ過ぎているため、ピラネージの版画技法全体の脈絡の中で、理解できたかと言うとしっくりしていない感覚が少し残る。（潮江委員）

・ピラネージ研究に長年取り組んでいる筆者による本論文は、技法の側面からピラネージ芸術における初期の変化の解明に取り組み、筆者は「腐蝕液描法」と名付けた技法の導入によって何を失ったのかを明らかにしようと記している。作品観察と考察の結果、ハッチングに用いられた腐蝕液描法は分業を容易にするためだったが、ピラネージの体質には必ずしも合わない描法を不定形なものを精密に描くべく突き詰めることで作家独自の濃密な画風が展開したと結論づけている。

ピラネージの技法研究は必ずしも多くなく、独自性と説得力のあるある貴重な研究である。気になったのは「腐蝕液描法」は欧文ではどのように表現されているである。また、文献が 2008 年で止まっており、最近の研究が踏まえられていない点では研究ノート的な論考と言わざるを得ない。先行研究と問題の所在についての導入部があるとよかったか。直接関係があるか不明であるが、次のような論考もある。

Myra Nan Rosenfeld, “Picturesque to Sublime: Piranesi’s Stylistic and Technical Development from 1740 to 1761” in Memoirs of the American Academy in Rome. Supplementary Volumes. Vol. 4, The Serpent and the Stylus: Essays on G. B. Piranesi (2006): 5591.

（栗田委員）

喜多孝臣「日本近代デスマスク小史－石膏型取りと彫刻のあいだ」

・これまで日本のデスマスクについての論文を見たことがなかったので、大変興味深く読む事が出来た。特に新海竹太郎が、夏目漱石のデスマスクをどのように制作する（とる）か思案にくれているところが面白い。まず古田亮は藤田文蔵が、工部美術学校でラグーザからデスマスクのとり方を学んだと推定し、藤田は関連技術として、油土の原形から石膏型をとる技法を修得していたとしている。美校塑造科新設まで、石膏型取り方法が理解出来ていなかったが、塑像科以降、大きく発展し、今日の隆盛を見ることになった。その初期プロセスが理解出来る好論文である。（金原委員）

・本稿は、日本では近代になって西洋文化が流入した後に制作されるようになったデスマスクの歴史と日本の彫刻家との関わりを、現存最古のデスマスクと思われる藤田文蔵作狩野芳崖のデスマスク（1888 年）から 1930 年代の作例まで跡づけ、第 2 章で複製と彫刻教育、第 3 章で皮膚と髭の表現、第 4 章では死の直後の表情の証拠という視点から論じている。日本では、西洋美術の写実性が江戸期から高く評価され、受容されてきた。立体造形における人形と彫刻の境界については明治期から問題となったとこ

ろで、本稿が引用しているように、高村光雲、光太郎父子の作品と言説は、この論点においても重要な位置を占める。興味深いのは、フランスに留学しロダンに傾倒し、1909 年に帰国した高村光太郎が、おそらく西洋のアカデミックな彫刻製作法の一つとして人体から直接に石膏型をとる方法を学び、それを彫刻としては否定的にとらえていながら自身で将来したベートーヴェンのデスマスクが佐藤朝山の手に渡り、日本で 1910 年代以降にデスマスク製作法が普及した点、また、「生々しさ」に対する評価と、デスマスクを美術作品の一ジャンルをなす彫刻としてとらえるかという点に時代の変遷が認められることである。それまで美術品として展覧会に出品されたことがなかったデスマスクが第 2 回プロレタリア美術大展覧会（1929 年）では美術作品として展示されたという点も、プロレタリア美術の性格を考える上で興味深い。

複製の販売への言及は、一般需要者側の造形思考を考える一助ともなる。

喜夛氏はこれまでプロレタリア美術について調査研究を進めておられ、これまでの研究蓄積がこの度の論考にも活かされている。デスマスクして、日本近代における彫刻概念の形成や、写実性と理想化などを考察するという視点に独自性があり、今後の立体造形に関する考察に新たな切り口を提案している。

（山梨委員）

評価指標 21	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート

新型コロナウイルス感染症の状況には変動があったが、令和４年度は予定のプログラムを全て実施することができた。感染症対策のノウハウが蓄積され、定員の削減などの状況は続いたが、どの事業も中止の判断とはならなかった。

【一般向け】

小学３年生以上を対象とする「わくわくアトリエ」と中学生以上を対象とする「実技講座」は、各企画展の関連事業として行い、実施に際して担当学芸員からのフロアレクチャーをプログラムの一部に組み込んだ。この取り組みは参加者が展覧会の鑑賞のポイントをつかむことにつながり、制作にも役立つと考えられる。今後も続けることで、参加者のより深い鑑賞や、豊かな制作につなげたい。

令和３年度は中止が多くあった「ねんど開放日」「えのぐ開放日」は、応募倍率が高い人気の事業である。後者は２年ぶりに実施することができた。参加人数は最大 40 名と定員を絞っていたが、参加者の事後アンケートではそのことに対して不満が述べられることはなく、満足したとのご意見を数多くいただくことができた。

「ちょこっと体験」や「創作週間」、「ロダン館デッサン会」についても、昨年度と同様のコロナ対策を講じて中止なく実施することができた。参加者層について述べると、後半になるにつれ新規の参加者が毎回来られる状況が続いた。「ちょこっと体験」は好評で、準備した材料が時間内に尽きてしまう状況であった。また、館外の活動として、エスパルスドリームプラザで企画展の宣伝とアウトリーチを兼ねて、「ちょこっと体験」（インクを使わない銅版画体験）を実施した。こちらも多めに準備した材料が両日とも時間内に尽きてしまうほど好評であった。館内で行っている「ちょこっと体験」とは異なり、偶然制作に参加された人々が、気軽に作れる作品の出来に感動している姿が印象的であった。

【学校向け】

昨年度中止であった「ボランティアスタッフとの鑑賞」は年度途中から実施可能となった。しかしながら、周知ための郵送費を捻出できず、広報は当館ウェブサイトしか手段が無く、申込はなかった。昨年度中止であった県総合教育センターや各地区の図工美術会の教員向け鑑賞教育研修も実施することができ、鑑賞教育を中心に学校教育との連携を深めることができた。また、校外学習の一環として「ロダン館ななふしぎ」を希望する学校が、昨年度との開館期間の差をふまえても増加した。学校側の需要が回復してきたことによるのかもしれない。

「ねんど教室」や「えのぐ教室」も昨年度より多くの募集が集まり、台風の影響による１校、新型コロナウイルスの感染が確認された幼稚園１園を除き、それ以外の申し込み団体は全て実施することができた。加えて、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきた年度後半になるにつれて、活動後に展覧会の観覧を希望する施設が増えていった。

「ロダン館デッサン・スケッチ・クロッキー」は、５つの学校が行った。美術科がある高校や中学校の美術部が主になるが、県東部や西部の地域からも参加があった。また、単学級の中学校が「ロダン館ななふしぎ」とスケッチを行うなど、他の実技室プログラムを連続して受ける学校や、他の美術館が休館をしていることから、当館へデッサン会を希望する学校もあった。

普及・教育プログラムの新たな試みとして、オンライン鑑賞教育プログラムを２本開発した。内容は当館ウェブサイトのデジタルアーカイブのコンテンツを活用したもので、小学生けと中学生向けとがあ

る。開発にあたっては教員の協力を得て、意見の聴取、学校現場での試行実施を行った。このことによって、プログラムに学校側の視点を取り入れることができ、利便性の高いものとなったと考えている。

今後は、コロナ禍の影響により様々な制限が加えられた活動をいかに現在のニーズに合った教育プログラムへと変えて実施していく必要性があり、対応が急がれると思われる。

評価指標 26	地域空間、住民等と連携した取組に関する職員レポート

これまでの地域等の連携をさらに深め、地域をパートナーと考える経営を推進した。

地域・企業等

（1）県立美術館ボランティア

・令和 4 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、年度当初、学校グループ、ギャラリーツアーグループ、タッチツアーグループの活動は休止となっていた。しかし、日本博物館協会による 9 月の予防のガイドライン変更を受け、学校グループ、ギャラリーツアーグループについては、感染対策を行いつつ、実施可能とした。実際の活動については、学校グループは申込がなかったため活動はなく、ギャラリーツアーグループは研修の都合から 2 月に再開した。

また、昨年度はボランティアの任期 3 年目にあたっていたが募集を実施せず、希望者の任期を 1 年延長し、引き続き活動いただくという対応をとった。任期 4 年目にあたる本年度は、ボランティアの募集を行った。昨今の状況を鑑み、ボランティア体制を更新して、任期を 1 年とし、更新可能なものとした。加えて、資格年齢を 20 歳から 18 歳に引き下げ、学生等の若者層にも参加しやすいものとした。

選考と研修の結果、令和 5 年度 4 月より 125 名の方をボランティアとして登録し、活動していただいている。

・活動方針：「来館者サービスの充実、美術館運営支援、地域連携推進」

（2）有度山地域に立地する５施設、県立美術館、ＳＰＡＣ、日本平ホテル、日本平動物園久能山東照宮による「有度山フレンドシップ協定」による協働

・コロナが第５類に移行したことをふまえ、今後、企画展との連携事業を検討していく。

（3）草薙商店会等との協働

・草薙地域で活動しているグループと連携して美術館前の広場でロダン・ウィーク「丘の上のマルシェ」を毎年開催している。

（4）ロダン・ウィーク

平成 26 年度、開館 20 周年を契機に開始した「ロダン・ウィーク」。工事休館中であった令和３年度を除いて毎年実施している。

（5）企画展における企業等との連携による効果

館内レストラン「ロダンテラス」で県産品を使用した特別メニューを３種類提供した。

ムセイオン静岡

谷田地域の文化教育７機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、ＳＰＡＣ、グランシップ、ふじのくに地球環境史ミュージアム）は、谷田の丘陵地帯及びその周辺地域の文化振興やまちづくりに貢献する目的で、「ムセイオン静岡」として相互協力し、文化の丘づくりを推進してきた。

令和４年度は、県立大学と連携し、当館学芸員の解説を聞きながら展示を観覧する企画を行った。(みる誕生　鴻池朋子展)。また、毎年秋に開催している「文化の丘フェスタ」では、他機関と連携して「スタンプラリー」を実施した。

評価指標 34	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート

昨年度に引き続き、様々な広報手段を活用し、県内外への広報を推進した。

新たな取組

①「みる誕生　鴻池朋子展」では、目が見えない方や見えにくい方向けのワークショップおよび展覧会告知のため、静岡県視覚障害者情報支援センターをはじめとした機関へのチラシの発送、および静岡視覚特別学校へは直接訪問しての広報活動を行った。

②「近代の誘惑」展では、旅行会社による美術館めぐりツアーへの協力を行った。

③「近代の誘惑」展においては、ボランティア（地域連携・草薙ツアーグループ）と協力し、出品作品をモチーフとした和菓子の創作とそれを活用したイベントを実施した。

④「ガストロノミーツーリズム」事業として、館内レストランで県産品を活用したメニューを提供した。

引き続き実施した広報

①ホームページ、フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、YouTube による情報発信

②展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供（記者投げ込み、プレスリリースの利用）

③ポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り

④県広聴広報課との連携（県民だより）

⑤広報サポーターへの情報提供

⑥展覧会共催者（新聞社・テレビ局）等との連携

⑦企画展に関連する講演会・イベントを館内で行い集客を図った。

⑧美術館ニュース「アマリリス」の発行

⑨インターネットミュージアム等の美術館・博物館情報サイトで展覧会をＰＲした。

⑩事務局を通じた県内４大学の学生への広報

県有文化施設と協働した広報

・毎年秋に谷田地域の文化教育７機関が「ムセイオン静岡」として連携して取り組んでいる「文化の丘フェスタ」で「スタンプラリー」を実施した。

評価指標 40	運営基盤の強化等に関する美術館職員のレポート

県立美術館は、令和４年３月に「５ヵ年計画」を策定した。

計画では、美術館の基本理念（美術館の目指す姿）を実現するため、８つの実施方針を定めている。

その一つが「運営」であり、運営基盤の強化を目指すこととしている。

計画期間は令和４年度から８年度までの５年間であり、今までの主な取り組みは以下のとおり。（一部令和３年度に前倒し実施）。

（１）運営基盤の拡充（収入の確保）

・令和３年度の古代エジプト展では、当初予定になかった文化庁の令和２年度第３次補正予算事業「ARTS for the future!（コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業）」の補助金交付を受け事業を実施した。

・令和４年度の「輞川図と蘭亭曲水図」展では、タカシマヤ文化基金の助成を受けてシンポジウムを実施し報告書を作成した。

・予算外部資金の確保に向けて関係部局と調整し、ふじのくに応援寄附金（個人版ふるさと納税）を美術館基金への積立金とする仕組みを整えた。

（２）企業との連携強化による運営の充実

・静岡県経営者協会の全会員に令和４年度の美術館年間スケジュールや企画展のちらしを配布した。

・静岡県経営者協会会員の交流会に参加し、館長および学芸員による会員向け講座を計画していたが、新型コロナ感染状況の悪化により中止となった。

・令和５年度は館長および学芸員がセミナー講師として講演を行う予定である。